

じやりみち

…被災地支援情報…

第107号 発行日 2016.4.23
被災地 NGO 協働センター

〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10

TEL:078-574-0701 FAX:078-574-0702

HP:<http://ngo-kyodo.org/>

Facebook:<https://www.facebook.com/KOBE1.17NGO>

E-mail:info@ngo-kyodo.org

口座番号:01180-6-68556(郵便振替)

東日本大震災から5年を迎えて

東日本大震災から5年の月日が流れました。犠牲者は15,894名、震災関連死3,410名、行方不明者2,561名(2016/3/10現在)になります。亡くなられた方々には心よりお悔やみ申し上げます。沿岸では、大型トラックが土ぼこりをあげながら行き交い、コンクリートの要塞のような防潮堤や土盛りが進み、高台移転のための土地の造成により山が切り崩され、道路づくりが各地で進み、これまでの風景とは一変し、以前の面影が全くと言っていいほどなくなってしまっています。街の復興は一見、進んでいるように見えますが、被災者の方の心は5年経っても癒えるものではありません。そんな街並みを見て、涙ながらに「自分の土地が道路になっちゃうだんよ。」と話す被災者。また「こんなはずじゃなかった。海が見えないから怖い」という声も聞きます。



私は今回まけないぞうの回収ために東日本大震災が発生した3月11日に合わせて岩手県遠野市を訪れ、陸前高田市、大船渡市、釜石市、大槌町などの被災地沿岸を訪問しました。これまで何度も訪れ、その様子

を見てきましたが、今回ほど造成などが進み、極端な被災地の変化に驚いたことはありません。これまで通い慣れた沿岸の道もかさ上げにより十数メートルも上がっていました。そのため、道路が毎回変わっています。「コンクリートから人へ」が「人からコンクリート」に逆戻りです。それは21年前の阪神淡路大震災から学んだ教訓のが生かされていないということです。

3月11日の毎日新聞で立命館大学の塩崎賢明教授は「出発点は復興構想会議が11年5月にぶち上げた「復興構想7原則」である。そこに『被災者』という言葉はない。象徴的なのは『被災地域の復興なくして日本



経済の再生はない。日本経済の再生なくして被災地域の真の復興はない』というフレーズだ。(中略)昨年度までに支出された復興予算は約24兆円だが、そのうち被災者支援は約1兆8000億円だ。被災者生活再建支援金は最高で300万円。予算の大半は大型の公共事業や『日本再生』に流れており、いまま避難している人が17万人以上もいる。」と指摘している。このような指摘をしている人は少なくありません。

どうして、こうも災害があるたびに同じような失敗が繰り返されるのでしょうか？ハード面にお金がつぎ込まれ、被災者の「くらしの再建」への道筋はなかなか十分なものとは言えません。阪神・淡路大震災では、5年で仮設が解消されましたが、東日本では今後5年間仮設に暮らさざるを得ない人たちが2,700人もいるそうです。ボランティアが減少し、仮設から復興住宅への移動によるコミュニティの崩壊、これからの生活拠点をどこにすればいいのか揺れ動く被災者の心、仮設で取り残される人々、原発の被害者など問題は山積みです。

81歳の方が、高台集団移転を希望していますが、その女性が「家を建てられるまで後3年かかる」と言ったその言葉が心に響いた。高齢の人ほど、1年1年が重くのしかかる。娘さんが「ちょっと見ない間に腰が曲がった」と。一日でも早くみなさんが安心して暮らせる環境を整えていかなければなりません。

また、原発の被害者は順次故郷への帰還が進んでいるように見えますが、人口が元のように戻らず、公共機関や仕事、インフラ整備も追いついていません。なんといっても放射能への不安が払しょくされたわけではないのです。そしていまなお二重生活や避難生活を強いられている人たちが多いためです。

今、兵庫の地から専門家や弁護士などが「一人ひとりが大事にされる災害復興法」という呼びかけをしているその趣旨には「問題解決のためには、第1に一人ひとりの被災者の『住まい』を保障する基本法が必要だ。第2に、一人ひとりの被災者の『くらし』を支える具体的な仕組みが必要だ」と書かれています。

このような、一人ひとりが大事にされる仕組みが確立されるように、当センターも被災者ひとり一人に寄り添いながら、声なき声に耳を傾け、その声を多くの人たちに届けていきたいと思えます。今後ともご支援のほど、よろしくお願ひします。(増島 智子)



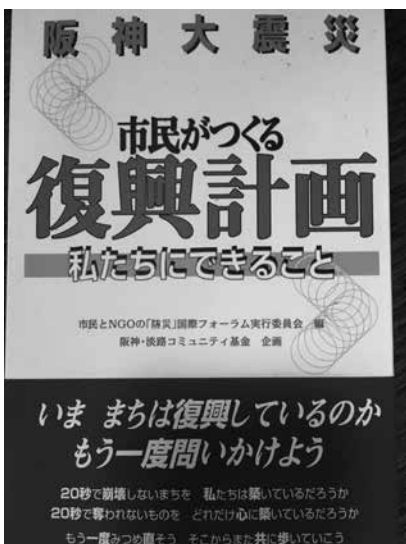
常総水害「市民がつくる復興計画」

昨年9月10日に発生した関東・東北豪雨から半年以上が経ちました。鬼怒川決壊により大きな被害を受けた常総市では未だに不自由な生活を余儀なくされている方々が多くいらっしゃいます。2月末で第二次避難場所のホテルや旅館も閉鎖となりました。かろうじて自宅に戻った方の中にも、水回りや寝る場所の修繕のみで、他は手付かずという状況の方もいます。半年経っても被災地の復旧はまだまだ終わっていません。



常総市では復興計画が3月末を持って策定されました。残念ながら住民の声を反映させるための期間や手段はごく限られていました。そんな中、当センターが水害発生直後から活動を共にしてきた茨城NPOセンター・コモンズが運営する「たすけあいセンター JUNTOS」の横田さんが中心となり、市の計画へ住民の声を反映させる試みを続けています。1月には「市民の集い」を開催し、商業、農業、子育てし やすいまちづくり、高齢者・障害者、外国人、教育などのテーマ別に話し合い、さまざまな課題が浮き彫りになりました。例えば、農業では水路が確保されず、田植えに間に合うかどうか、もし作付けが できなければその場合の補償はどうなるのか？子育ての場合、そのママさん たちが避難所などでストレスを抱え、他の場所に移らざるを得なくなったケースもあり、避難所の在り方も問われました。高齢者・障害者では、障害などへの 理解や、共有する場を持つということが挙げられていました。商業では人口が減ると商売ができないので、人口流出をとめた いなどの意見が出ていました。外国人は安価な賃金で就労

させられ、将来への選択肢も少ないという課題も でした。それぞれに共通するのは、災害で顕在 化した問題ですが、日常 からある問題でそれを克服することが誰もが暮ら しやすい、優しい街づく りにつながるということ です。例えば、バリアフ リーにすることで、お年 寄りも歩きやすくなり ます。



21年前の阪神・淡路大

震災でも多くの市民が意見を寄せ合い「市民がつくる復興計画」を作りました。その中には、『まちづくり』はもと もと、長い時間をかけて地域づくりに対する住民の夢を紡 ぎ出し、課題を共通のものとしつつ地域住民の合意をつくり、住民が主体性を発揮して行政とパートナーシップのも とに進めていくべきものである」と書かれています。常総 市でもこの住民主体の『まちづくり』への取り組みをスター トさせたところです。



当センターでも、常総市民が主体となった復興計画をつ くり住民が主役の地域づくりに微力ながら協力していき た と思っています。復興までの過程はまだまだ長くかかり ますが、皆様の今後のご協力もどうぞよろしくお願い 致します。

○復興寺子屋を開催しました

4月22日、23日に常総市にて「たすけあいセンター JUNTOS」と連携をし、復興寺子屋を開催いたしました。明石まちづくり研究所の松本誠さんを常総市にお呼び して、住民の方々と「市民がつくる復興計画」につい て意見交換などを行いました。

CODE 未来基金について

被災地 NGO 協働センターの姉妹団体である CODE 海外災害援助市民センターは 20 年間に渡り海外の被災地支援を行ってきました。阪神淡路大震災から 20 年という節目を迎えた 2015 年、CODE は次世代を担う若者に注目し、将来、NGO で働きたいと考える若者らを支えるための「CODE 未来基金」を設立しました。

「NGO で働きたい。」「NGO で社会貢献をしたい。」という想いを持っていても、将来や生活を考えると職業として選ぶことは難しいという若者がたくさんいます。また「NGO というものがあることは知っているが、触れる機会がない。」「NGO に必要なスキルが何かわからない。」と、一歩を踏み出せない若者もいます。「CODE 未来基金」では若者が災害 NGO で働くという生き方を安心して選べる環境をつくっていきます。NGO が特別な場所ではなく日常に溶け込んだ場所になるために、より多くの方のご協力が必要です。

2016 年度より「未来へつづくインターンシップ」「若者が企画するフィールドワーク」「若者と学びあう NGO セミナー」の 3 つの項目で若者自身が企画したプログラムを募集しました。CODE 未来基金の第 1 号プログラムとして、神戸大学 2 回生の宮津隆太さんが企画したフィールドワーク研修事業を実施することが決定しました。国内事前研修の後、CODE 支援を行うフィリピン・セブ島をフィールドに「若者が企画するフィールドワーク」を実施する予定です。今後、HP やフェイスブックなどでこのフィールドワーク研修

の現状を報告していく予定です。宮津さんは「このプログラムに関わってくださる若者にとって、どんなに小さくても、なにかの「きっかけ」になるようなものにしていけるように頑張ります！」と今回の抱負を語っています。

未来基金はこのような若者が活躍する場を支える「CODE 未来基金サポーター」を募集しています。ぜひご協力をお願いします。

CODE 未来基金 HP

<http://code-jp.org/future-fund/index.html>

能登半島地震から 10 年

2007 年 3 月 25 日に発生した能登半島地震から丸 9 年が過ぎました。能登半島地震は、2007 年 3 月 25 日に発災し、甚大な被害をもたらしました。

中越・KOBE 足湯隊(現 KOBE 足湯隊)は能登半島地震をきっかけに結成されました。地震発生直後から、避難所での足湯ボランティアを行っています。その際にできたつながりを元にして、仮設住宅や復興住宅での足湯ボランティアなど継続的に支援活動を行いました。能登



に私たちが向かうだけでなく、能登半島からも 1 月 17 日に神戸にお越しいただくなどの交流を行ってきました。近年では、仮設住宅にお住まいの方々の同窓会を開くなど能登の被災地に関わり続けています。また、写真集「いとしの能登よみがえれ」の作成をきっかけにして、毎年「お熊甲祭り」にも参加させていただいています。

今年度は、震災がつなぐ全国ネットワークの支援金を活

用して、能登半島地震 10 年に向けた冊子作成事業を行う予定にしています。足湯隊が当時関わっていた仮設住宅の区長さんや住民の方々などにヒアリングを行い、10 年間の間にどのような気持ちの変化があったのか、どんな出来事があったのかを記録に残していこうと思っています。



災害からの復興は長い時間がかかります。復興に向けた動きの過程をしっかりと記録することが次の災害にもつながります。能登半島地震をきっかけに生まれ、関わり続けてきた足湯隊がこうした記録を住民の方々と共に作り出すことにも意味があるのではないかと思います。

学生インターン紹介

こんにちは。私は神戸学院大学3年生の今中麻里愛です。私は1995年1月17日阪神淡路大震災の1時間半後に兵庫県尼崎市で生まれました。当時、尼崎市は震度6の揺れが襲い母が入院していた病院も大きな被害を受けました。窓ガラスは割れ、出産時に必要な機械も壊れ、その中で私は生まれ、多くの方の支援を受けました。余震が続く中、恐怖と戦いながらも母の出産を決断し救って下さった助産師さん、自らも被災しながら何時間もかけて歩いて病院へ食料を持ってきて下さった親戚の方や、「出産後は栄養を取らないとだめだ」と言って母にご飯を分けて下さった近所



の方、たくさんの方の助けがありました。このことを知り、今度は私が助ける側の人になって恩返しをしたいと考えようになりました。しかし、最初の一歩がなかなか踏み出せず、2011年3月11日、東日本大震災が起

こったときも当時高校生だった私は何も行動に移すことができませんでした。行動に移すことのできない自分が恥ずかしく、実際に被災地に行って支援をしている方々を間近で見ると心の変化があるのではないかと思い、昨年8月に大学のインターンシップでCODE海外災害支援市民センターのスタッフとして働き多くのことを学びました。「NGOとは?」「NGOで働くということ」についてなど、実際に働いているスタッフ声を多く聴くことができました。皆さん自分の仕事に誇りを持っている方ばかりで、そこで感じたことは「このような大人になりたい!」ということです。そしてこのご縁もあって、3月から被災地NGO協働センターで学生インターンをさせていただいております。何かと不慣れでご迷惑をおかけする点も多いと思いますが、今後ともよろしくお祈いします。

■事務局ボランティアも募集しています!

私たちと一緒に活動して下さるボランティアさんを随時募集しています!

初心者の方も全く問題ありません。ボランティアでの活動を通して、NGOや市民社会、防災・減災のことも学ぶことが出来ます。やる気のある方大歓迎です。ぜひお越しください。

■編集後記

みなさま、じゃりみち編集担当の頼政です。じゃりみちの発行が遅くなり、大変申し訳ありません。

このじゃりみちを編集している最中に、熊本県の大震災が発生し、スタッフがその対応に追われています。急いで編集をしたので、不備などがありましたら、申し訳ありません。

熊本県での地震に対しては、活動をすでにスタートしております。詳しくはHPをご覧ください。また、東北支援のためのクラウドファンディングも開始しています。皆様のお知り合いにも広げていただくと幸いです。

どうぞよろしくお祈い致します。



当センターの姉妹団体「CODE海外災害援助市民センター」の活動にもご協力よろしくお祈いします。

昨年4月に発生したネパール地震の支援活動を開始しています。皆様ご協力よろしくお祈いします。

詳しくはHP等をご覧ください。

HP:<http://code-jp.org/>

■入会・カンパのお願い

被災地NGO協働センターでは、会員を随時募集しています。普段なかなか活動にご参加できない方でも賛助会員等で活動に間接的にご参加いただくことが出来ます。ぜひよろしくお祈いします!

活動カンパ、事務局カンパも随時受け付けています。

下記の振込先によるお祈い致します。

- ★団体会員 年会費 ¥ 10,000 × 1口以上
- ★個人会員 年会費 ¥ 3,000 × 1口以上
- ☆団体賛助会員 年会費 ¥ 10,000 × 1口以上
- ☆個人賛助会員 年会費 ¥ 3,000 × 1口以上
- ☆自由選択会員 年会費 ¥ 任意の額

郵便振替 加入者名：被災地NGO協働センター
口座番号：01180-6-68556

第58号 2016.4.23



発行所：被災地 NGO 協働センター 〒652-0801 神戸市兵庫区中道通 2-1-10
 TEL:078-574-0701 FAX:078-574-0702 HP:http://ngo-kyodo.org/



東日本大震災から5年が過ぎました。阪神・淡路大震災の5年目は仮設住宅が解消され全ての人が復興住宅などへ住まいの再建を果たしました。そしていまだ東日本の被災地では仮設住宅があり、仮設を出るのは長い人になると今後5年間も仮設暮らしが続くと言われていています。被災者の人が安心して暮らせる環境は、まだほど遠いのが現実です。

3ヶ月ぶりに岩手県の被災地を訪れました。今年3月11日である大津波から5年の月日が流れました。被災者のひとり一人にそれぞれの「3月11日」があります。「もう5年経ったんだね。早いような、長かったような・・・。」「ほんとに津波は憎らしい」ポツリ、ポツリと話し出します。「あの時は本当に地獄だった。津波のお陰とは言えないけれど、こうしてみなさんに支えられてここまですることができました。ぞうさんがなかったら一日ぼーっとしてばかり、ぞうさんのお陰です」。「昔の書類を整理していたら、いろんな人に支えられたんだな～と思って、これからは少しずつ返していきたい」と。「今年中には、仮設を出て地元に戻れるかな？もう帰ると決めたから、前を向いて行くしかない。」などあの日を振り返りながら。



また、別の作り手さんは昨年11月に仮設から復興住宅に移り住んで、すでに2回も体調を崩したそうです。「仮設に帰りたい。いちいちボタン押して（エレベーターで）下に降りないといけない。

誰も来ないし、どこにも行かない。ずっと部屋にいるよ。夜も寝れねえし。仮設の時は毎日2回も花に水やりをしたし、散歩もできた。」と訴えています。21年前の神戸でも同じ言葉を聞きました。なぜまたこの言葉を聞かなくなてはならないのでしょうか。仮設では統廃合の話が出てきており、「また、知らない人と一緒になるのは大変、仮設から仮設への移動は大変、出ていく人はいいけど、残される方はね」とこぼす人もいるように「取り残された感」が心配です。また「もう私たちも高齢で力がないから、ここに居るの。追い出すようなことはしないとと思うけど」と不安を募らせている方もいらっしゃいます。

そんな中で、3月11日に住民さん有志で追悼集会在公民館で行われました。手作りこれまで仮設での思い出を綴った写真が所狭しと飾られ、昔話に花が咲き笑顔があふれました。中には「公式の追悼集会には出る気にはなれなかったの、こちらに来ました。私の住んでいる復興住宅では何もないので、こちらに来てよかった」と話す人もいました。津波が襲った午後2時46分には海のほうに向かってそれぞれが祈りを



捧げました。中には人目を避けるように、住宅の中庭でも、涙ながらに祈りを捧げる女性もいました。家族や親類、大事な人を失くした多くの人たち、「なぜ、自分だけが生き残っているのか」と悩んだり、いつかその大切な人が帰って来るのではと想いを巡らせる人たち、被災者一人ひとりの5回目の「3月11日」がめぐってきました。

東日本大震災の被災者のつぶやき

「震災から5年が過ぎましたが、仮設住宅住まいです。仮設を出るまで、ぞうさんを作りながらがんばります。」
 (2016/3/14 大船渡市 女性 70代)

「ぞうさんに会って早5年も過ぎました。ぞうさんの顔を見ると楽しくなります。うれしくもなり、辛さも忘れます。これからもずーっと続けられますように」
 (2016/3/14 大船渡市 女性 70代)

「震災から5年早い、長い月日が過ぎ流れていきます。主人の写真が居間に、毎日見て、いつか会える日を夢見ています。あの日自宅は全壊。そして夫婦二人とも一緒に流され3キロ、水の中にもぐり、死の覚悟でした。ガレキをかきわけ頭がでて、水が首までできていて、どうしようかとすがりついた木の上に思い切り上がりました。そして雪が降り、寒い夕暮れ水の上、その後、一人の男の人の声、あーっと思い、私は気を失い。気がついたら大船渡病院のベッドの上、先生と看護師さんがいました。そして2週間後に退院して、長男宅に世話になったあと、仮設生活へ。これからどうしようと思っているときに、ぞうさんと出会いました。仮設の隙間にテントを張り、そこで遠野から先生方が来て教えて頂き、何にもわからないまま、一日かかっても形も身体も顔も出来ずどうしようかと思ひながら、1ヶ月くらいで何とか出来ました。でも顔はなかなかうまく出来ず、頑張り続けました。なんとか仲間に入れて頂き、5年の足。本当にぞうさん ありがとう。ぞうさんの鼻のように、私も長く生きていきます。ぞうさん、本当にありがとう、感謝」

(2016/3/11 陸前高田市 70代女性)

※参考に阪神・淡路大震災からの10年目被災者のつぶやきを紹介します。



「今、思えば私にとって
ぞうさんと出逢えた事で、
どれだけ慰め、励まされ
たことか。忘れることの
できないあの恐ろしい阪
神・淡路大震災。仮設で
の生活、着の身着のまま
での苦しい毎日でした。

そうして、ぞうさんと出会えたのです。毎日は苦しい中、ぞうさんをつ一つ作り、鼻ができ、目、リボンとぞうさんができたかわいさ。苦しさも、悲しさも忘れて本当に心がなごみ、私にとってぞうさんは『命の力』となって。復興住宅にもなかなか入ることができず、やっと5年目に住宅に入居することができました。震災から10年今でもぞうさんを作っています。

私にとってぞうさんは手放すことができません。これからもずっとぞうさんがある限り、本当にぞうさんありがとうです。」(2005年 東灘区女性)

支援者からのメッセージ
こんな支援者もいらっしや
います!!

(有) すがはらの会長菅原陽子さんは、ちょうど身重の時に新潟地震(1964)に遭い、下半身水浸しになりながら病院を駆けずり廻りました。残念ながらお子さんは流産されました。また、ご主人は尿路結石で入院されたそうです。その後仕事一筋で今日まで走り続けてこられ、これまで3回生死を彷徨いました。こうしてご苦勞を重ねながら今日まで生かされてきたとのこと。現在81歳という齢(よわい)になり、最後のお勤めとして東日本の支援を決意し「まけないぞう」を応援して下さい。(新潟市在住)



「まけないぞうさん受け取りました。ありがとうございます。とってもとってもかわいいです。作り手によって少しずつ表情が異なって味がありますね。」(2016/3 大阪府)

「届きました「まけないぞう」さん♡テレビで見たよりずっと可愛いですね。今はお一人で作られているとか、大変な思いをされて、辛く寂しい思いを私が全部わかることはできませんが、『貧者の一灯』、少しでもの思いでお願いしました。作者の方におりがありましたら、『くれぐれもお体を大切にされて可愛いぞうさんを作り続けて下さい』とお伝えください。スタッフの皆様も大変でしょうがお元気で過ごしてください。」(2016/3 奈良県)

「まけないぞう」届きました。どのぞうさんも可愛くて、届いたぞうさんを一体一体ギュッと抱きしめてしまいました。「手作り」ということにもビックリ。作り手の皆様の愛情がたっぷりこもった「まけないぞう」をあちこちに飾

っています。私も一昨年9月、主人を病で亡くし今も時折無性に辛く寂しい時がありますが、これからはこの「まけないぞう」に癒されそうです。(2016/3 茨城県)

「拝啓 桜ももうすぐ見頃をむかえます。まけないぞうさんも湯田小卒業生にプレゼントして20年過ぎようとしています。卒業生、担任の先生方が自分たちも何か役に立ちたいと毎年タオルを集めて「送って下さい」と持ってきてくれます。ほんの小さな気持ちがつながってつながって和になっていくんだと改めて思います。小学生の気持ちを送らせていただきます。お役に立てれば幸いです。」(2016/3 広島県)

READYFORに参加しています。
ぜひみなさんのお力をお貸しください。

東日本大震災が発生した2011年3月から東北での被災地支援を行ってきました。その一つが「まけないぞう」です。まけないぞうは、阪神・淡路大震災で生まれた被災者支援の復興グッズで「被災者の生きがい・仕事づくり」を目的に誕生しました。

私たちは、発災後1年間東北にスタッフを常駐させました。その後は活動拠点である神戸と岩手・遠野市を車で往復し、16回にわたり沿岸部の大槌町・大船 渡市・釜石市・陸前高田市などを訪れ、現地の方々とともに約6万頭のまけないぞうの製作を行ってきました。被災地には「まけないぞうを作っている間は、震災や津波のことを忘れられる」と言ってくれる方々がたくさんいます。しかし、いよいよ初代「まけないぞう号」の走行距離が限界に近づき、このままでは、活動を継続することが難しくなります。被災地へまけないぞうの材料を届け、完成したまけないぞうを預かり神戸へと運んでいた、被災地と神戸の架け橋は初代「まけないぞう号」でした。しかし、この5年間神戸と東北を行き来し、被災地では、被災者の方の足となったり、ボランティアさんに乗せて訪問したりとたくさん活躍してくれ「まけないぞう号」も、走行距離はすでに19万キロとなり、これ以上長距離を走るには無理が出てきました。そこで今回のプロジェクトでは、二代目となる活動用の車を購入したいと考えています!車購入後は、これまで通り二ヶ月に一度二週間程度の滞在を目標に継続した活動を行っていく予定です。これまで私達も資金集めに力を尽くしてきましたが、あと少し資金が不足しています。そこで、皆様のお力をお貸し頂けないでしょうか?

いま、45%まで達していますが、目標達成まであともう少しです。この企画は目標達成額にならないと不成立となり、みなさんのせっかくのお申し出もなくなってしまいます。

ぜひ、みなさんのご協力をお待ちしています。

詳細はこちらまで↓

<https://readyfor.jp/projects/makenaizo>

